

高齢インドライオンの飼育管理について

古田 洋（横浜市立よこはま動物園）

高齢のインドライオン、No. 11 パールヴァティ、No. 12 ガウリー、NO. 13 サティ（共にメス、2000年6月3日生）を飼育管理するにあたり、健康管理を目的としたトレーニングおよび飼育環境の改善を行った。健康状態の把握のため、体重測定および採血を実施することを目的としてハズバンダリートレーニングを実施した。体重測定は、スノコ状の台座（155×90×12 cm）の下にバースケール（寺岡精工、秤量 1500 kg）をセットし、ターゲット棒で動物がスノコの上で伏臥するように誘導して実施した。採血時には、動物が柵に対して横向けに体を付けるように誘導した。針の刺入は尾の静脈にしたが、水飲み用バットを取り外してできたスペース（66×35×10cm）から尾を手繰り寄せて行った。この際、採血の実施までには次のステップを踏んだ。1. 伏臥状態の動物を犬座させ尾が開口部に入るよう仕向ける。2. フックで尾を手繰り寄せ、尾が半分以上出るようにする。3. 尾の根元あたりを保定する。4. 尾を保定し駆血する。5. 針刺激の練習。6. 採血の実施。採血時には3名が役割を担い、それぞれ誘導および給餌、尾の保定、採血の実施とした。採血の実施まで要したトレーニング実施回数は、No, 11 で 50 回、No, 12 では 46 回だった。採血が可能となったからは、概ね毎月の血液検査を行い、健康状態のモニタリングをしている。また、飼育環境の改善として、運動場で足を滑らせることを防止するために、運動場の傾斜部に土留め用丸太（長さ約 5m、10 本）を設置した。また、寝室の床面（10 m²）のほぼ全面におが粉約 500 kg を敷き詰めた。おが粉を敷く前、パールバティは正常な歩行ができないほど運動機能が低下していたが、おが粉を敷くことで、後足を踏み込む時にひっかかりができ、歩行できるようになり、QOL の著しい低下を免れたものと考えている。今後もより良い飼育環境を目指して飼育にあたっていきたい。